

氏名・（本籍地） 渡 辺 賢 治（北海道）
 学 位 の 種 類 博士（文学）
 学 位 記 の 番 号 甲第82号
 学 位 授 与 の 日 付 平成23年3月15日
 学 位 論 文 題 目 **幸田露伴研究**
 論 文 審 査 委 員 主査 千 葉 眞 郎
 副査 大 場 朗
 副査 関 井 光 男

渡 辺 賢 治 氏 学位請求論文審査報告書

「幸 田 露 伴 研 究」

論文の内容の要旨

本論文は、日本近代文学を代表する作家・幸田露伴の創作活動を作風の変遷に沿って追求し、露伴文学の性格と特徴とを明らかにしたものである。序論・本論・結論の三部から構成され、本論は第一章が生い立ち、第二章が就学時代、第三章が北海道時代、第四章が文壇デビュー時代、第五章が作風への懐疑・揺籃期、第六章が「真風流の真小説」模索の時代、第七章が史伝・考証の執筆時代、第八章が後期露伴文学の作風と作風の基調ごとに括っている。

先ず第一章では創作活動を明らかにするため、基盤となる伝記を検証している。前半では出生・家系に触れ、後半では幼少期における幸田家の生活環境を検証している。度重なる転居及びその年時の特定には、新たな資料が当てられている。こうしたなかで注目すべきは、創作時に顕著となる仏教的基調が祖母の生活態度から受けたものであることを回想録「少年時代」を通して指摘し、露伴文学の起点としていることである。

第二章では小学校就学前後から（電信）修技学校までの経緯を検証し、漢学の素養の背景を吟味している。取り上げている項目は目新しい内容ではない。だが転機をもたらす修技学校就学については詳細を極め、先行研究を質す内容となっている。評価に値する。

第三章では、これまで露伴研究の空白期とされていた余市時代に焦点を当て、入手可能な限りの地元資料を駆使して検証している。ここに確認された新たな事項は多い。なかでも余市時代を「突貫紀行」及びそれ以降の起点として位置付けている点が注目される。

第四章では、先ず帰京後の動向と処女作に触れてい

るが、斬新さは見られない。だが文壇デビュー作及びそれ以後の初期作品群の検証には論者ならではの見解が示されている。例えば紀行文「酔興記」や『首楞嚴経』及び『法華経』などの仏典を基に、作品舞台と作品世界とを解明しようとしている点である。この視点は余市時代からの延長として捉えられており、妥当な論調といえる。

第五章では「地獄溪日記」や逍遙宛書簡を基に作風の変化を検証し、一連の芸道小説や「般若心経第二義注」に至る経緯が論証されている。論者はこの時期の露伴の観点を後期文学観に通底する起点として捉え、次章以降の＜真風流の真小説＞解明に論究している。妥当な論調といえる。

第六章がその＜真風流の真小説＞を論じた箇所、露伴の「不動の信念」の表れであったと指摘。論拠に登場人物が織り成す縁起の理法＜因縁仮和合＞を挙げ、『二日物語』『風流微塵蔵』をも検証している。

第七・八章では『頼朝』や『連環記』といった史伝物への経緯と作品世界とを、縁起や因縁を根底に吟味している。いずれも前章からの思索的展開だが、論者は必然的な作風の変化を起点とする後期露伴文学の特徴として捉えている。

総じて、各起点を設定することによって、露伴文学の一貫性を論証したことになる。論証項目自体は先行研究を上回る内容ではないが、露伴文学の全体像を鳥瞰して特徴を捉えて視点は評価されよう。

審査結果の要旨

本論文の目指したものは、露伴文学の性格と特徴と

を解明し、それらがどのような思想的変遷のうちに展開したかを論証したものである。一貫して漢学と仏教的色彩の濃い露伴文学を、直話を基にした先行書やそれを踏まえた先行論文、及び諸仏典に照らして解明し、起点を設けながら論証している。

論文全体としては第一章で家庭環境に触れ、祖母からの影響を露伴文学の第一起点として捉えている。第二章では就学経過を吟味し、漢学の涵養を特筆しながら、特殊な修技学校就学をことさら詳論して次章に繋いでいる。なおここで扱っている各就学年時及び内容には新たな資料が当てられ、先行研究を質すことになった。第三章では電信技手として赴任した余市時代を検証し、結果「突貫」して展開する露伴文学の第二起点として捉えている。検証には地元資料が当てられ、先行研究を上回る成果を収めた。第四章では初期作品群を分析して「風流」観に及んでいる。第五章ではその「風流」への懐疑が生じたことを、日記や書簡を通して論証。仏典注釈「般若心経第二義注」の執筆背景と注釈内容とを吟味の上、露伴文学の第三起点として捉えている。第五・六章では第三起点から派生する「真風流」観に貫かれた作風を分析。第七・八章では史伝物といわれる素材の転換に必然さを見据えつつ、なお縁起の理法に通底する作風を第四起点として捉え、露伴文学の一貫性を論証している。こうした起点の設定は、露伴文学を鳥瞰する上で有効に働き、且つ本論文を構成する骨子となっている。

なお上記の各起点の提起は、露伴研究にあって従来から論じられている個々の項目であり、現状でも最先端レベルの課題である。従って先行研究に負う論証部分が見られるのは当然なのだが、一貫するものとして論じているのは希有な事例である。本論文の特色と言えよう。

ただし論者自らも述べているように「今後の課題は多く」、今後なお検証を加えなければならない項目がある。例えば起点の源流となる大内青巒や東開和尚との交流関係であり、平賀源内からの影響関係のさらなる吟味である。また論証の仕方にも難を残した。先行研究の無批判的な受容と安易な評語使用とに起因しているのであろう。何しろ当代状況との絡みを等閑にしているのが惜まれる。

だが、こうした問題はやはり今後の研究課題とするものであって、現状の研究レベルの最先端を把握し一貫して提起した価値を損なうものではない。課程博士論文という将来の可能性を秘めたものとしては十分である。

審査委員三名は本論文を精読し、口述試問を行ない、

その後に審査委員会を開き、慎重に検討を重ねた結果、本論文が課程博士の学位授与に値する内容であるという評価で一致した。その旨を、ここに書面をもって報告する次第である。